



TITLE:

物性理論大学院(<特集>東京大学教養学部)

AUTHOR(S):

三村, 勝一

CITATION:

三村, 勝一. 物性理論大学院(<特集>東京大学教養学部). 物性研究 1966, 7(1): 147-148

ISSUE DATE:

1966-10-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85927>

RIGHT:

物 性 理 論 大 学 院

教養学部物理教室に籍をおく大学院生は約30名。このうち物性理論専攻が10名程度、素粒子原子核理論が15名位、物性実験が数名といったところである。正式には理学系大学院物理学専門課程に所属していて教養学部物理教室に居られる先生に指導を受けているわけである。どこの大学でも同じようにM1のときは理論専攻の学生通のセミナーや授業などが多く、研究室とのつながりはあまりないが、M2以上の学生は先生方に個々指導を受ける。物性理論と称する学生のテーマは学会のセクションで云えば大部分統計力学物性基礎論に入る内容である。波多野は固体中の陽電子消滅ボーズ系のゼロサウンドを、石川はs-dの計算とボーズ系のゼロサウンドを共に金沢、水野先生の指導で調べている。村瀬は日大に移られた杉浦氏と共に小野先生と輸送係数の密度展開を計算している。その他磁性理論（峯崎、高田）、フェルミ流体理論（浅野）、相転移（三村）と雑多である。特に伊豆山先生を迎えてから範囲が広くなつたようである。もつともここは講座制でないためか誰がどの先生に属しているというのは必ずしもはつきりせず、駒場に多く居られる若い先生がしばしば相談相手となる。制度的にもマスターコースでの大学院学生の指導は集団指導ということになつており、ドクターに進んでもこの様相が強い。このシステムで先生がたと大学院学生とのつながりが弱いと集団指導というより集団放任になると心配されるむきもあるが駒場の大学院学生は少々受身とはいえ十分な指導を受けているようである。これは有能なスタッフが十分揃っているせいでもあるようだ。しかしこの先生方にもジュニアの講義その他の雑用が多く大学院生ばかり時間をさくわけにもいかない。ここは大学院生にとって居心地も良く落ちついて勉強できるところだが、条件は必ずしも最良というわけではない。特に10人の学生にせまい2部屋しかないのはともかく、学生の部屋と各先生の部屋がバラバラなのはなんとも不便である。ここは教室の規模が小さかつたころの習慣か、大学院生が自由に何をいつてもいいという雰囲気がありコロキウムでの議論にプラスしている。しかし学生の要望という点では逆に云えば何を云つても誰も聞いて取り上げてくれないとか、または一人の先生^{*)}ばかりに苦情

東大教養特集

を集中させるということにもなりかねず思うほどには大学院の声が反映されな
いようだ。難点ばかり挙げてしまったがここはやはり我々には研究の場所とし
て望ましいところと思うし実際に多くの研究がなされていることを付記してお
きたい。

(三村勝一)

*) 該当者の姓名不詳です(編集者)